

家具づくりの原点は、林業の研修

木と暮らしの工房 代表 鳥羽山 聡
URL <http://kitokurashi-no-koubou.com/>



旭川近郊の東川町で、家具の再生と製造を行う小さな会社を営んでいます。

「新しい木から新しい家具を作るばかりではなく、お客様が愛着のある家具を長く使うためのお手伝いをする」というのが創業の理念で、14年目を迎えました。

従業員は私を入れて4人で、うち2人が他社で研修中という、少し変わった会社かもしれません。

25歳の時に、きっかけがあって「木と一生付き合っていこう」と決め、全く関係ない仕事からいわゆる「脱サラ」して、道立北見高等技術専門学院の造形デザイン科に入り直し、旭川近郊の家具メーカーに5年勤め、2002年に独立しました。



東川町の田んぼに囲まれた工場

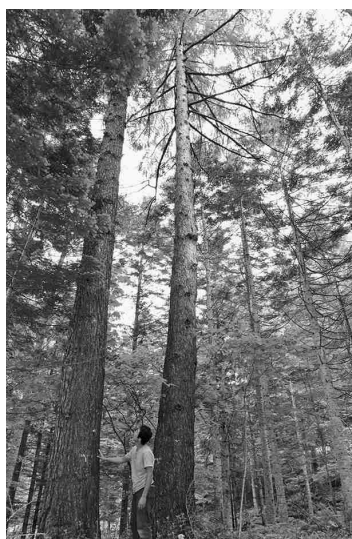


工場の中

◆仕事の原点は、林業の研修

まだ技術専門学院の学生だった20年ほど前に、春休みの1ヶ月間、十勝のある民有林で林業の研修をさせて頂いたことがあります。これから木工を生業として生きていく前に、木を育てる現場を知りたいというのが動機でした。林業会社といっても当時はすでに規模を縮小して従業員は親族だけの会社でした。面識は全くなく、一通の手紙にしたためた熱意をくんでくれて、住み込みで働かせてもらいました。雪解けのすすむ春の山で作業を手伝い、天気の良い日には座学と称して様々な人と出会わせて頂き、夜は酒を飲み交わしました。今から考えれば夢のような1か月で、その後も続く森との関わりが今の仕事と生き方の原点になっています。

木を育てる仕事というのは、本当に地味な仕事で、だけれども素晴らしい、そして何よりウソがない仕事だと感じました。同時に今は木を伐りすぎてしまった時代だということも知りました。お世話になった林業家の言葉を借りれば、「森の元本をほとんど使いこんでしまった時代で、良木という元本が回復し、健全な利子を生み出す力を持つまでには、100年、200年かかる」ということなのだと思います。



研修させていただいた山林の樹齢80年を超えるカラマツ



外国樹種見本林の樹齢百年以上のトウヒの風倒木を使って

す。その森では、素性の良い木や太い木にはテープを巻いて木籍簿なるものに管理して、良い木を残して独自の森づくりをしていました。

私がお世話になった林業家の2代目、3代目の方々が、出会った数年後に相次いでこの世を去りました。今の時代を生きる自分はどのように木に向き合っていけばよいのか、重い宿題を課されたような気がして、それは今もずっと同じです。

◆「木と暮らしの工房」を創業

その後、旭川の家具製造会社で5年間修業させて頂き、独立しました。

十勝での研修の時に、町の人たちからは「あの人たちは毎日山に行って何をしているのだろう」くらいにしか思われていないと冗談交じりに話していました。山に行ったらこなしきれないくらいの仕事があるのだけれど、現代の効率を求める社会から見れば、山の仕事はあまり理解されないのかもしれないかもしれません。たった数十年前までは林業で潤っていて、そのおかげで映画館が2つや3つはあった町ですら、普段の生活の中で森や林業は遠い存在になっているのだと思います。

林業の研修で確信したのは、人間が適切に森に働きかけて、森の恵みである木を使って人間の生活を豊かにすること自体は素晴らしいことだということです。林業や森（木）をもっと実感のある生業として人間の生活（暮らし）に結び付けたいという思いから「木と暮らしの工房」という名前をつけました。



オリジナル第1号のHOツール

◆家具の再生サービス

きっと家具を製作する時は、作り手が思う以上に、森の中でもかなり選りすぐりの材料を使っているのかと思います。木でしっかり作られた家具は長く使えるはずで、作る人は大勢いるので、自分は直したり、長

く使うための手伝いをしたりする人間になろうと決め、「家具の再生」を始めました。

当時は家具の再生を看板にする会社はほとんどありませんでした。依頼される家具は様々で、代わりがないので失敗は許されない厳しい仕事でした。見積もりが難しく、後でこれだけかかったから代金は上がりますというような不安な商売にはしたくなかったので、一度見積もった額は必ず守りました。その分、見積りが甘くて泣きながら仕事をしたことは何回もありました。

ただ、家具の再生をしていると、様々な家具と、その分のお客様の「思い」に出会うことができます。ほとんど100%のお客様が喜んでくれます。お金を頂いて、しかも喜んでもらえるのは作り手にとって幸せなことです。自分の中でも良い意味で理想の家具のイメージが崩されました。もちろん今でもこだわりは強くありますが、お客様がお金を払ってでも使い続けたい家具に数多く触れるうちに、家具はこうあるべきだという自分の中にあった狭い勝手な見方は消えて、広く家具というものを見渡せるようになったと思います。昔の職人の手の跡を見ることができし、数年、数十年経ったあとの家具の姿を知ることがもできます。自分が作った家具では経験できない時間を経験することができます。

販売する人は、家具は末代ものですから、とよく言いますが、家具の再生を続けていると少なくとも塗装はそこまで持たず、やはり何かしら適切なメンテナンスをしないと家具を良い状態で長く使うことは無理なのかと思います。

以前道北の小さな町のお寺さんに家具の修理に行った時に、お坊さんから「職人というのはお客さんに勉強させてもらって、生計を立てることができる、素晴らしい生き方だ」と教えてもらいました。家具の再生は、まさにその言葉の通りだと思います。



80年以上前につくられた桐筆筒



洗い出し後の桐箆笥



お客様の家具には
様々な思いが詰まっている



長年使われてきたエクステンションテーブル



古い塗膜を落とし再塗装、
椅子の張り替えも同時に行う

◆家具産地旭川の資源を使う

旭川家具という家具はないが、あるとしたら家具産地旭川だと言った人がいました。

家具産地旭川の財産は、やはり何といても「人」だと思います。最盛期から見れば業界は縮小したかもしれませんが、経験を積んで技能も知識も責任感もある人がたくさんいる。特に再生をしていると、たった一つの家具を直すのに、それに見合った材料を探すにしても人の手を借りなくてはできない。家具は一人ではできない。できたとしても自分の小さな力量の範囲の中でしか、仕事はできない。産地旭川では、自分の力以上の力でお客様の要望に高いレベルで応えられる。

職人は技術的に完成したと思ったら、きっとプライドが邪魔をして頭打ちになってしまうのではないかと思います。「分からないことがあれば人に聞く」というのが自分の取り柄で、私は産地旭川の資源を使って仕事をしていこうと思っています。



旭川家具センターの自社ブース

◆人を育てる

家具の再生は、本来は「消費地」で行う仕事だと思います。旭川は周辺市町村を含めてもそれほど人口は多くなく、家具「産地」旭川で家具の再生を行う意味は何だろうと、ずっと問い続けていました。昨年10月に(株)キャンディハウス創業者で旭川家具を牽引してきた長原實さんがご逝去され、20年、30年かけて旭川を「モノづくり王国」に育てるようにと言葉を遺し、次の世代に託しました。

きっと、産地旭川で家具の再生をするということは、便利屋的で場当たりの家具修理をするということではなく、お客様の要望に高いレベルで応える再生をすることはもちろん、どちらかというとな効率的で手仕事の技術をしっかりと継承したり、家具の再生で培ったノウハウを新しい家具の開発に役立てたりして、旭川家具の下支えをするようなことにつながるのではないかと今は考えています。

そんな折、家具の再生にたずさわりたいという若い人が集まってきてくれました。一人は木地加工という木工旋盤の技能を、もう一人は椅子張りの技能をそれぞれ別の会社で修行してもらっています。

家具部材を製作する木地加工は旭川では数軒しかなく、担い手も高齢で引き継ぐ人がいないというのが現

状です。家具の再生においても、椅子の背もたれのスポークが1本折れただけでも、木地加工で同じものを作れなければ直せないということになります。懇意の木地屋さんには以前からこちらで人を用意するから後継者を育ててもらえないかという話をしていました。そして、実際にその可能性がある若者が現れました。年齢も親子以上に離れている一人親方のもとで耐えられるのかと心配で、興味があれば見学に行ってくださいという、翌日から自主的に通い詰め、削りはじめました。3週間ほどして気持ちが揺るがないということで採用しました。当たり前なのですが、今まで後継者がいないところに若い人がいると、出入りする業者には期待もかけられるし、仕事振りも見られます。



スポークが折れたロッキングチェア



分解後、木地加工で製作したスポークを取付け

これが工場の中に入って家具製造をするのであれば、それほど外部の人から名前も顔も覚えられることは多くありません。いずれは多くの人と自分の顔で取引することになるかも知れないので、技術も人間力も磨いてもらえればと期待しています。自分の職場では用意できないような環境を他社での修行の中で経験させてあげることができるのだと、改めて思い知りました。

もう一人は椅子張りの技能を習得してもらうため、旭川家具の大手メーカーと協議して、2~3年を目途



他の不具合も直し、再塗装して再生完了

に出向という形で研修させて頂くことになりました。本当に有難いことです。椅子張りは張替えができるようになるまでには、何年も経験を積む必要があります。受け入れ先の家具メーカーにとっても、こんなに長期の研修生を受け入れることも初めてであり、椅子張りで一通

りの工程ができるように女性の職人を育てるのも初めてということでした。今回の研修生の受け入れは会社としても意義を感じているとおっしゃって頂き、こんな小さな会社の提案を受け入れてくださり、感謝しかありません。彼女は本州から就職希望を出し、同じ時期に他にも職人希望の女性が就職することが決まっていたのでいったんは断ったのですが、それでも履歴書を送ってきてくれ、自社では受け入れられなかったやる気のある人材を、業界で受け入れることができたことに、旭川家具の懐の深さを感じました。



木地加工の研修生

◆投資をする時期

昨年7月に旭川市から東川町に工場を移転、新築しました。新築と言っても、それほどお金はかけられなかったのですが、一般住宅並みに断熱し、照明も全てLEDにして、無駄にエネルギーを浪費しないように配慮しました。冬の寒さばかりだけではなく夏の暑さもやわらぎ、それなりに快適になりました。これから人を徐々に増やそうと思っていたところに、いきなり

新人3人が加わり、しかも、2人は修行中ということで、本当に有難いことなのですが、経営的にはつらいところはあります。

人を雇うかどうか悩んでいた時に、お世話になった十勝の林業家の奥さんに相談してみました。返ってきた手紙には、自分が嫁いできてからはほとんど借金の返済と整理で終わったようなものだけでも、あの時に投資して森づくりを始めていなかったら、今の森はなかった、決して後悔はしていない、との返事でした。私はただの家具屋だけれども、今が投資する時期なのかと思っています。

そして投資する対象は私の場合、「人」となります。木地加工修行中の社員は、少なくとも1年間は練習だけで商品を手掛けることはできません。1日中練習ばかりよりも、午前中集中して練習し、午後はこちらの工場家具製造作業をしてもらっています。そして、修行させてもらっている木地屋さんを取引している主要な旭川家具のメーカーの方々とも当初より相談にのって頂き、今後の育て方を継続的にアドバイス頂いたり、具体的な援助を賜ったりしています。椅子張りを研修中の女性社員にしても同じで、旭川家具工業協同組合の加盟企業との話し合いの中からこのような取り組みが実現でき、そういった業界の理解と応援があって、人を育てることができています。



今年入社した女性の職人
10月の技能五輪全国大会に出場予定

◆終わりに

以前私の会社にいた従業員で、彼は独立したのですが、よく「自分にはもらった技術で食べることができている」と話していました。技術は自分の力で獲得したという自負もあるでしょうが、上手い人の技術を見たり、失敗を直してもらったりしながら、教えてもらって覚えた、といった方が本当なのかもしれません。旭川家具も景気の良い時期も大変な時期もありましたが、

長い歴史があって、そこに働く人がいたから技術や知識が継承されて今があるのだと思います。時間的にも空間的にも多くの人がいたから、旭川では品質の良い木製品を当たり前で作ることができるのでしょう。

徳のある木は、山持ちも、木を切る人も、運ぶ人も、製材する人も、作る人も、売る人も、使う人も皆を幸せにする、というようなことを聞いたことがあります。

今年6月の旭川デザインウィークでは、林産試験場からご提案頂いた道産の植林シラカバやダケカンバを使った試作品や、十勝で研修した森のタモ材を使ったテーブルを展示いたしました。2016年の「君の椅子」の製作は自治体分を弊社が担当し、中川町産のナラ材を使っています。地元の木を使って、多くの人が幸せになるようなモノづくりができたらと思います。



君の椅子2016モデル
中川町産のナラ材を使用



植林シラカバ材を主に使ったデスクの試作



十勝の山林のタモ材を使った約4mのテーブル